

六五二	三	壬子			13
六五三	四	癸丑			14
六五四	五	甲寅			15
六五五	元	乙卯	齊明		16
六五六	二	丙辰			17
六五七	三	丁巳			18
六五八	四	戊午			19
齊明					
天皇と中大兄不和 孝徳天皇没 齊明、飛鳥板蓋宮に即位 しきりに土木工事を行う 有間皇子、牟婁の湯に行く 有間皇子刑死					

B 天皇、都を難波長柄豊碕に遷す。(同 同年十二月九日)

C 阿倍大臣薨せぬ。(同 大化五年(六四九)三月十七日) 【十歳】

D 是に、天皇、大郡より、遷りて新宮に居す。号けて難波長柄豊碕宮と曰ふ。

(同 白雉二年(六五一)十二月晦) 【十二歳】

E 太子、奏請して曰さく、「冀はくは倭の京に遷らむ」とまうす。天皇、許したまはず。皇太子、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉り、并て皇弟等を率て、往きて倭飛鳥河辺行宮に居します。時に、公卿大夫・百官の人等、皆随ひて遷る。是に由りて、天皇、恨みて国位を捨てたまはむと欲して、宮を山碕に造らしめたまふ。

(同 同四年(六五三)是歳) 【十四歳】

F 皇太子、天皇病疾したまふと聞きて、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉りて、并て皇弟・公卿等を率て、難波宮に赴く。(同 白雉五年(六五四)十月一日) 【十五歳】

G 天皇、正寝に崩りましぬ。(同 同年十月十日)

H 田身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以てす。復、嶺の上の兩つの槻の樹の辺に、觀を起つ。号けて兩槻宮とす。亦是天宮と曰ふ。時に興事を好む。廻ち水工をして、渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の謗りて曰はく、「狂心の渠。功夫を損し費すこと、三万余。垣造る功夫を費し損すこと、七万余。宮材爛れ、山椒埋れたり」といふ。又、謗りて曰はく、「石の山丘を作る。作る随に自づからに破れなむ」といふ。(同 齊明二年(六五六)是歳) 【十七歳】

I 有間皇子、性黠くして陽狂すと、云云。牟婁温湯に往きて、病を療むる偽して来、国の体勢を讃めて曰はく、「纔彼の地を觀るに、病自づからに蠲消りぬ」と、云云。天皇、聞しめし悦びたまひて、往しませて觀さむと思欲す。

(同 同三年(六五七)九月) 【十八歳】

J 紀温湯に幸す。天皇、皇孫建王を憶でて、愴爾み悲泣びたまふ。

(同 同四年(六五八)十月十五日) 【十九歳】

K 留守官蘇我赤兄臣、有間皇子に語りて曰はく、「天皇の治らす政事、三つの失有り。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚むること、一つ。長く渠水を穿りて、公糧を損し費すこと、二つ。舟に石を載みて、運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有間皇子、乃ち赤兄が己に善しきことを知りて、欣然びて報答へて曰はく、「吾が年始めて兵を用ゐるべき時なり」といふ。(同 同年十一月三日)

L 有間皇子、赤兄が家に向きて、樓に登りて謀る。來膝自づからに断れぬ。是に、相の不祥を知りて、俱に盟ひて止む。皇子帰りて宿る。是の夜半に、赤兄、物部朴井連鮪を遣して、宮造る丁を率ゐて、有間皇子を市経の家に囲む。便ち馱使を遣して、天皇の所に奏す。(同 同年十一月五日)

M 有間皇子と、守君大石・坂合部連葉・塩屋連鰯魚とを捉へて、紀温湯に送りたてまつりき。舍人新田部米麻呂、従なり。是に、皇太子、親ら有間皇子に問ひて曰はく、「何の故か謀反けむとする」とのたまふ。答へて曰さく、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」とまうす。(同 同年十一月九日)

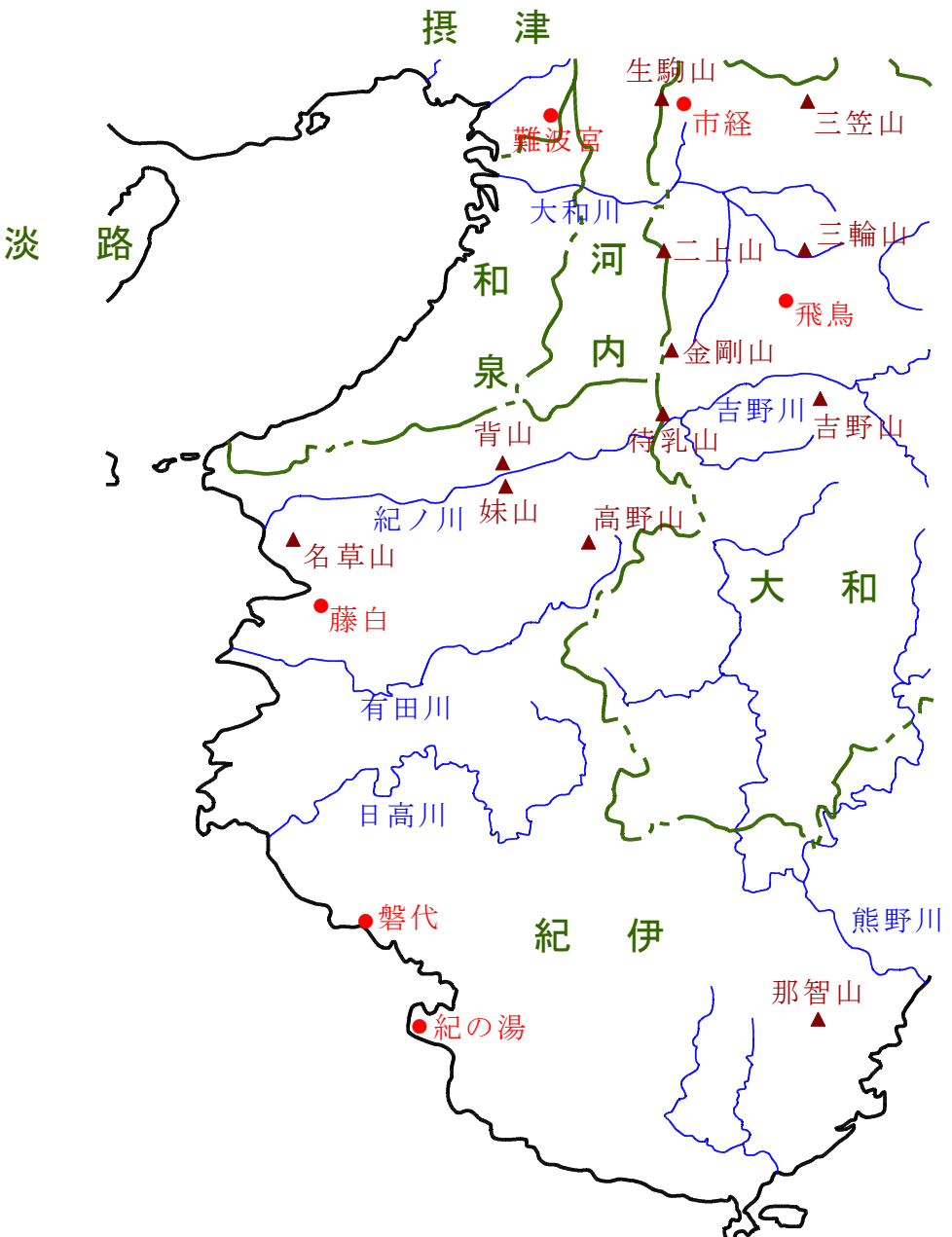
N 丹比小沢連国襲を遣して、有間皇子を藤白坂に絞らしむ。是の日に、塩屋連鰯魚・舍人新田部連米麻呂を藤白坂に斬る。……守君大石を上毛野国に、坂合部葉を尾張国に流す。(或本に云はく、有間皇子、蘇我臣赤兄・塩屋連小戈・守君大石・坂合部連葉と、短籍を取りて、謀反けむ事を卜ふ。或本に云はく、有間皇子曰はく、「先づ宮室を燔きて、五百人を以て、一日兩夜、牟婁津を邀へて、疾く船師を以て、淡路国を断らむ。牢圍るが如くならしめば、其の事成し易けむ」といふ。或人諫めて曰はく、「可からじ。計る所は既に然れども、徳無し。方に今皇子、年始めて十九。未だ成人に及らず。成人に至りて、其の徳を得べし」といふ。……)(同 同年十一月十一日)

有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

- ① 磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む(二・一四一)
② 家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る(一四二)

《参考》

- ③ たまきはる命は知らず松が枝を結ぶ情は長くと思ふ(六・一〇四三 大伴家持)
④ 八十種の花は移ろふ常磐なる松のさ枝をわれは結ばな(二〇・四五〇一 大伴家持)



長忌寸意吉麻呂、結び松を見て哀しび咽ぶ歌二首

⑤ 磐代の岸の松が枝結びけむ人は帰りてまた見けむかも (一四三)

⑥ 磐代の野中に立てる結び松情も解けず 古思ほゆ 未だ詳らかならず (一四四)

山上臣憶良、追ひて和ふる歌一首

⑦ 鳥翔成あり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ (一四五)

右の件の歌どもは、柩を挽く時作る所にあらずといへども、歌の意を准擬ふ。故以に挽歌の類に載す。

大宝元年辛丑、紀伊国に幸しし時、結び松を見る歌一首 柿本朝臣人麻呂歌集の中に

⑧ 後見むと君が結べる磐代の子松がうれをまた見けむかも (一四六)